

「研究的創作脳」と「事務的作業脳」の間で

松尾 哲矢（スポーツウエルネス学科教員）

昨年、16年目にして初めて1年間の研究休暇をいただいた。立教大学では7年に1度、研究休暇を取れる制度になっているから1度、流したことになる。今思うとなんと勿体ないことをしたと思う。

それまで研究休暇は別に取れなくても良いか、と思っていたところもあったが、その重要性が身に染みた1年間であった。その思いを強くした理由も含めて、ここでは「研究的創作脳」と「事務的作業脳」について述べてみたい。とはいえ、ここで左脳や右脳といった脳科学の話をするつもりはない。

大学教員となって、今年で30年目を迎える。大学教員は、教育も担うが、研究者としての役割も担う。研究者としての業務についてどの程度できてきたか覚束ないが、研究をする上で「研究的創作脳」の活性化が重要となる。

ここで「研究的創作脳」（以下、「創作脳」）とは、着想、構想、フレームづくり、調査・実証、論文作成等の一連の研究過程で求められる独自の創作的思考とその働きを指す。一方、「事務的作業脳」（以下、「作業脳」）とは、事務的な業務に必要な作業的思考とその働きを指す。

それは、7年間の勤務を終え、最初の研究休暇を取ろうとした2月のことであった。4月から次期総長になることが決まっていた大橋英五先生から直接の電話をいただいた。学生部長になってくれとの依頼であった。断るすべもなく、2006年4月から4年間、本務に就くことになった。その後、2010年4月から4年間、学部長を仰せつかった。そのこともあってだろうか。「創作脳」を働かせることの困難を感じる事が頻繁になった。

「創作脳」から「作業脳」への移行は、たやすいのに、その逆は、何とも難しいのである。

勿論、役職に就くことで責任が重くなり、当然といえば、当然かもしれない。しかし、これは以前から感じていたことで、役職に就いたから急にというわけではない。

事務的作業に没頭すると、研究的な創作をすべき時間になっても思考が働かないし、考えようという気になれないのだ。脳という表現を使ったのは、思考しようとしなないのは自らが怠惰なせいだ、という風に考えなくなかったこともあるが、

脳が働かない感覚を幾度となく実感したことによる。

「作業脳」を働かせる場面は、業務が具体的であり、一定のまとまりをもってしている。合理的思考を働かせていけば一定の期間で、一定の成果を挙げることも可能である。学生部長、学部長を経験するなかで立教大学の職員の皆さんとチームを組みながら生産的な仕事にも従事できたし、時には達成感を味わうこともできた。

それに引き換え、「創作脳」の働きは、果てしない探究の旅へと誘うといえはかっこよいが、時として抽象的で、五里霧中で先が見えない、まさに暗黒の海を泳ぐかのような感覚に陥ることも少なくない。得られる成果についても定かではない。だからこそ、一定の成果が得られたときは最上の喜びに満ちた感覚にもなるが、その過程は、やはりそう明るくはない。

いくつかの業務が重なると「作業脳」を要する業務を優先順位の上位にして、「創作脳」を要する業務は、優先順位を低くして先送りしがちになるのは、そのことが背景にあるからかもしれない。

その意味では、事務業務を抱えながら一定の研究を達成するためには、「創作脳」を活性化させる工夫が必要不可欠と言える（工夫なくして出来る人もいるかもしれないが）。

ここでは、その工夫について自らの経験も含め3つの点から述べてみたい。

第1は、「切り分け」のテクニックである。本学に赴任して、当時、社会学研究科教授であった宮島喬先生の大学院の授業や研究会に参加させていただいたことがある。宮島先生は日本の社会学研究のトップランナーの一人である。先生の言葉が忘れられない。「私にとって20時から24時は、神聖な時間なのです」と毎日、その時間帯を研究に充てることを決めておられた。そして、その時間帯を神聖なるものと位置付けておられたのだ。

日常と非日常の区分は難しいが、創作脳の活性化を誘発するには、日常的な実務的・社会的義務から距離をとり、ある意味では、非日常に誘う必要がある。先生は、創作脳を活性化させるための、「意識的な時間の切り分け」を行っておられたと考えることもできよう。

第2は、「締め切り」の設定である。「締め切りが作品を創る」という言葉を聞いたことがあるが、研究という営みは、終わりなき探究の旅でもあり、どこまでやればよいのか、そう簡単に決められるものでもない。そのため、下手をすると区切りなくどこまでもズルズルといってしまうがちになるのも事実である。そこで、外部で決められた「締め切り」に従う形で、やらなければならないものとして明確に位置づけることも重要である。筆者も何度助けられたことがか。

第3は、「触媒」と「触発」の活用である。研究を進める上で、自らの思考によっ

て構想し、整理しようとするが、あるところに来ると自分の頭の中だけでグルグルと思考が回りだし、思考停止の状態に陥ることがある。そこで重要になるのが「触媒」と「触発」である。創作脳を活性化させる上で、「触媒」に触れる必要がある。関係する学会や研究会、セミナーに出向く、関係する書物や研究を今一度レビューする、先達の研究者に示唆を受ける。その方法は様々だが、よい「触媒」に触れることが、よい「触発」を生むということを再認識し、実践することが重要だと言えよう。

その意味で、研究休暇の1年間は、外部からの仕事を断り切れず相応の事務的業務もあったが、少なくとも大学内の事務的業務から離れ、研究休暇という制度によって「意識的な時間の切り分け」が容易になり、これまでの日常とは異なる空間に身を置くことができたことは大変有難かった。1年間で出版するという締め切りを決めた。何度となく足を運んだ国会図書館は、創作脳に刺激を与えてくれる特殊な空間であった。また、さまざまな検討会やセミナーへの参加は多くの触発を与えてくれた。そして、博士論文を礎とした『アスリートを育てる<場>の社会学－民間クラブがスポーツを変えた』（2015年5月、青弓社）を上梓できたことは一つの成果と言えるかもしれない。

4月から現場に戻って、学生諸君と向き合える現場に戻れたことは嬉しい限りだが、相変わらず研究業務の優先・実行順位は低いままである。日常業務の中で「創作脳」を活性化する機会や環境を創り、成果を挙げていくことは容易なことではないが、挑み続けていきたいと思う。